パーヴォ・ヤルヴィの新たな歩み トーンハレ管のポスト就任へ

10月2日から3晩連続で、パーヴォ・ヤルヴィのチューリヒ・トーンハレ管弦楽団新音楽監督兼首席指揮者就任コンサートが催された。ヤルヴィと同郷の著名作曲家アルヴォ・ペルトが1976年、弦楽器とチェンバロのために作った《もしバッハが養蜂していたら》を、この日のためにピアノと弦楽、管楽四重奏と打楽器のために改訂し、世界初演された。蜂の羽音を模した冒頭はお茶目だが、終盤での和声展開はすばらしい。まるで自分が作った曲のように楽しみながら指揮したヤルヴィは、両手の平で作った円の中に余韻を大切に包み込みながら演奏を終えた。ペルトも舞台には上がらなかったが、指揮台の下で喝采を浴びた。

続くシベリウス《クレルヴォ交響曲》はNHK交響楽団とも昨年共演しており、ソリストも同じくヨハンナとヴィッレのルサネン姉弟だが、ヤルヴィに直接質問してみると、その音楽はN響とはまったく違うという。冒頭から北国の風が吹いてきたような気配。クライマックスまで長いアーチを貫く第1楽章、「大河ドラマ」の主題曲のような第2楽章。エネルギッシュだが、度を越すことなく、ルサネン姉弟は豊潤な声で厚いオーケストラにもビクともせず、素晴らしい歌唱を聴かせた。第1コンサートマスターが二人乗っていたが、当日のコンサートマスターを務めたユリア・ベッカーと首席チェロ奏者とのかけ合いが美しかった。第4楽章も駆ける馬が目に浮かぶほど雄弁。チューリヒ・ジング・アカデミーとエストニアの合唱団も、素晴らしい共演を聴かせた。

続く10月25日からの3日間の定期演奏会では、チャイコフスキー・プロジェクトが始動した。

ラッヘンマンの意欲作《マッチ売りの少女》スイス初演

日本では2000年に紹介されているラッヘンマンのオペラ《マッチ売りの少女》だが、スイスではようやく10月12日に初演された。演出と振付はチューリヒ歌劇場バレエ監督のクリスティアン・シュプック、指揮者は日本公演で副指揮者の一人を務めていたマティアス・ヘルマン、二人のソプラノはアリーナ・アダムスキ（1）と角田裕子（2）、ピアノは日本初演と同じ、第1がラッヘンマン夫人の菅原幸子、第2ピアノは辺見智子、笙ももちろん同じく宮田まゆみだった。開場時、すでに舞台上で演じているダンサーが無慈悲な世界へ導く。実際に音楽が始まると、バルコニー席で奮闘する演奏者たちにも興味をひかれ、前方の舞台と両方を見るのに忙しかった。手をこする音、音叉で音を確認しながらの歌、頬を叩いたり、舌をはじいたり、舌打ちをしたり、スポンジを擦り合わせたりする音が4階まで陣取ったバルコニー席から広がり、サラウンド効果も十分だ。街を行き交う人々にマッチを売るシーンが唯一アンデルセン童話を描写しており、それ以外はシュプックお得意の悲観的なダンス描写でドラマティックだ。二人のソプラノも美声で難役を果たした。月の光を示唆する風船と笙の音が創り出す幽玄の終幕も美しかった。最後は凍死体の写真を映し出し、その手の表情をダンサーに再現させるリアルさだが、降りしきる雪が美を貫いた。楽団員たちは「弾くのがむずかしいわけではないが、待ち時間が長かったりするので、集中力が必要」と話し、コンサートマスターを務めた岡崎慶輔は「ラッヘンマン氏の曲は初めてだが、まだこんなに新しい奏法の可能性があったのか、と勉強になる」と話していた。

クリスティアン・シュプック演出・振付によるラッヘンマン《マッチ売りの少女》
©Gregory Batardon

ウェーバー《魔弾の射手》は再演だが、女性二人の新キャストが光った。2022年のザルツブルク復活祭音楽祭でワーグナー《ローエングリン》のエルザに決定するも、クリスティアン・ティーレマンとニコラウス・バッハラーの闘いで宙に浮いた形になり注目を浴びたジャクリーン・ワーグナー（題名役はビョートル・ベチャワ）が歌うアガーテは、純ドイツ国民オペラとしての通説を覆すような演出で歌うのも容易ではないだろうが、軽めの声でどんなテジリタもリラックスして、また長いレガートも上品に歌いこなした。エンヒェンのリディア・トイシャーも美声ではないが、やはり完璧なテクニックで演者としても非の打ちどころがなかった。

第15回チューリヒ映画祭

第15回となるこの映画祭はチューリヒの秋の情景として定着しているが、映画音楽コンクールも併催されて、今年で8回目となる。上位の楽曲は映画音楽の指揮者として著名なフランク・シュトローベル率いるトーンハレ管弦楽団によって演奏された後、優勝者には「金の目玉」賞が贈られる。今年は46カ国321人の応募者がロバート・ルーガンの短編映画〝Danny and the wild bunch〟に曲を捧げたが、初の女性優勝者として台湾出身ニューヨーク大学修士課程留学中のチンシャン・チャンが賞金10000スイス・フランを手にした。

今年のガラ・プレミエはロン・ハワード監督作品『パヴァロッティ』で、二人目の妻であるニコレッタ・マントヴァーニは主演女優として映画祭に臨席していた。彼女のコメントがテレビニュースでも取り上げられ、ルチアーノ・パヴァロッティが世を去った12年前の初秋から、久しぶりに彼の美声を耳にする機会が増えた秋となった。